

独身勤労女性のライフコース選択と生活領域からみたアイデンティティとの関連

渡邊ひとみ, 内山伊知郎 2011 『発達心理学研究』22巻2号, pp.189-199.

労働政策研究・研修機構 臨時研究協力員 柴田 恵里佳

はじめに

近年、多くの調査で女性の就業率の増加や専業主婦を希望する女性の割合の減少が報告されており、仕事を継続したり、子育て後、再び仕事に復帰するという働き方を希望する女性が増えていることが示されている。

就業に対する女性の意識の変化、選択するライフコースの変化は、晩婚や未婚にも影響を与え、少子化にもつながる可能性があることから、女性の就業意識やライフコース選択に関連する要因を見極めることは非常に重要な課題であると思われる。

これまでのところ、女性のキャリア選択に関わる研究的なアプローチとしては、「仕事と育児」に対する女性の考え方に焦点をあてた研究が多く行われてきた。しかし、女性の就業率が高まり、価値観が多様化していると思われる今日、現在は未婚で将来的にライフキャリアを形成していく過程にある女性のライフコース選択を考える場合、仕事を重視するか、育児を重視するかという選択肢への志向だけでなく、自らの能力や個性をどのように考え、それをどのような場で発揮していきたいか、という個人の自己実現の要素や価値観の影響を含めて検討する必要があると言える。

そこで、本稿では未婚女性のライフコースの選択に関する要因を、日常の様々な生活領域への関与度、それらの領域における自らのアイデンティティの認識など様々な変数から検討している渡邊、内山(2011)による論文を紹介する。この論文は、従来の研究で取り上げられている家庭や職場以外に、余暇など様々な領域まで成人女性の生活領域を取り上げている。そして、それぞれの場での個人のアイデンティティのバランスや仕事との関わりについて検討するものである。

対象者と調査内容

質問紙調査の方法によって、大手企業に勤める未婚独身女性810名に調査票を配布し、回答を得た152名

分のデータが分析されている。分析対象者の年齢範囲は20-43歳で、平均年齢は28.76歳、職種としては事務職が116名(76.3%)と最も多く、営業職9名、研究職6名、その他21名であった。全体のうち、結婚希望者は146名(96.1%)、将来子どもを希望している者は134名(88.2%)であった。

質問紙は大きく、以下の4つの部分で構成されている。①今後のライフコースに関する設問(「継続型」「一時離職型」「退職型」「未確定型」の4つから最もあてはまるものを1つ選択)、②生活領域に関する設問(「家庭(実家)」「余暇活動」「職場」「習い事」「友人関係」の5つの生活領域のうち、自分にとって重要である順にランク付け)、③仕事への傾倒および探索行動に関する設問(13項目、5件法で回答)、④アイデンティティに関する設問(アイデンティティの4側面として「コンピテンス」「抑制」「ポジティブ感情」「対人行動」を表す20の形容詞項目へのあてはまり度を7件法で回答)。

得られた主な知見

まず、希望するライフコースの選択に関しては、仕事は辞めずに仕事と家庭、育児を両立したいという「継続型」と、出産を機に仕事を辞め、育児がひと段落した後には再就職するという「一時離職型」の選択率が、出産を機に退職し、育児に専念するという「退職型」や今の時点では特に何も考えていないという「未確定型」に比べて高くなっていった。著者は仕事と育児のバランスの取り方は一様ではないものの、多くの未婚女性にとって仕事との関わりは重要であり、出産後も仕事に携わる意欲をもっていることが明らかとなったとしている。さらにこの結果は、現代の独身女性が望む“理想のライフコース”の割合(内閣府2006)の結果とほぼ一致していることから、独身女性が計画しているライフコースは、“希望”や“理想”が大きく反映されたものである可能性が示唆されたとしている。

この結果については、対象者の多くが「20歳から40歳」であり、「女性が就業し続けることに対して抵抗がない、当然である」と考えることを「社会に認められる」と感じられる世代だということもあると考えられる。また、昨今の日本の経済状況の影響を受け、「仕事を辞める」というライフコースよりも結婚・出産後も「働くこと」を選択せざるを得ないと考えられるとも言えるのではないだろうか。

次に、日常生活における各生活領域の重要性をみると、「家庭（実家）」領域にのみ、ライフコースによる差がみられた。つまり未婚独身女性のうち、「退職型」を選んだ女性や「一時離職型」の女性の過半数が、「家庭（実家）」を最も重要な生活領域とみなしており、「継続型」の女性よりも「家庭（実家）」を最重視している割合が高いことが示された。「職場」領域ではなく「家庭」領域にライフコースによる差がみられたという結果に対して、就業を継続する女性の増加という社会的変化には、「職場を最重視する女性の増加」ではなく、「実家を最重視する女性の割合の低下」が関連している可能性が指摘されている。

他方で、各生活領域でのアイデンティティの得点に関しては、選択されたライフコースによる大きな差はみられなかった。ただ、職場領域での対人行動得点が高い女性、つまり職場での対人関係を重視する女性ほど、就業継続や一時離職といった仕事に携わるライフコースを選択し、さらにそのライフコースは職場領域の重要性の程度には左右されないことが示されている。この結果について、著者は、職場での対人関係を重視する女性は、仕事そのものや職場における他者との感情的つながりが強いと考えられ、この社会的つながりを重視する姿勢が、職場領域の重要性の程度に関係なく、就業継続や一時離職といった就業志向的な選択の割合を高めるのではないかと考察している。

これらの知見に対して、筆者は「家庭」を「実家」として定義している点、就業継続を希望する女性の割合の増加ではなく、「実家」を最も重要な場として考える女性の割合の低下によることが示唆された点について、新規な知見であると感じた。ただ、未婚の独身女性にとっての「実家」の重要性は、実家に居住しているか否かに影響されると考えられる。また、「家庭」に対するイメージは、「職場」領域との「重要性」の

対比で考える場合に、「実家」でも「これから持つ（持ちたいと考える）家庭」でも、家事または育児としてイメージされやすいのではないだろうか。この点について、「実家」と「これから持つ家庭」との違いに着目して検討される必要があると思われる。

本論文の意義

本論文では、近年の女性の労働環境や家庭での役割に関する意識の変化を論じた上で、仕事と家庭以外のいくつかの生活領域を含め、未婚独身女性のライフコース選択や各生活領域でのアイデンティティとライフコース選択との関連性が検討された。これまで女性の就業を扱った研究の多くが仕事か家庭かという点に焦点をあてて女性のライフコース選択との関連を扱ってきたのに対し、個人の様々な生活領域におけるアイデンティティという側面からライフコース選択との関連性を検討した点に、この論文の意義があると言える。重視する生活領域におけるアイデンティティの様相と選択されたライフコースに関しては明確な関連性が確認されていないが、著者自身も最後に述べているように、複数の生活領域における個人のアイデンティティの内容や発達、構造についてさらに調べた上で、ライフコース選択への影響を検討することが重要になってくるだろうと言える。また、本論文の対象者は「大手企業」の「在職者」で、「事務職」が多く、「結婚・子どもを希望する」者がほとんどであった点については、一般化の問題を著者自身も指摘している。さらに、未婚独身女性といっても、企業規模や職種、就業形態（パートや派遣労働者等）、具体的にどのような仕事をしているのか等が、各生活領域におけるアイデンティティのあり方や就労の価値観に影響を及ぼす可能性も考えられる。そういった課題も含めて、様々な生活の場で個人が自己のアイデンティティをどのように形成し、それがライフコース選択にどのように関わっていくのか、今後明らかな知見が得られるような研究の発展が望まれる。

しばた・えりか 労働政策研究・研修機構臨時研究協力員。
東洋大学大学院博士課程前期課程。主な著作に「成功・失敗体験の想起とその体験から受けた影響の想起が学習に対する態度に及ぼす影響」（修士論文）。社会心理学専攻。